

Title	「村松・藤田両先生と私」
Sub Title	
Author	中村, 文峰(Nakamura, Bunhou)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.523- 525
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0523

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るようと思われるのだが、指折り数えてみると、三十年

近い歳月が流れ、そのころの両先生はまだ三十代であったことになる。ご定年をお迎えになると伺つて、私はただただ時の流れの素早さを訝るばかりだ。

おくればせながら申し上げると、私は卒業後新聞社に就職し、退社したのちは文筆業で生計を立てて現在に至つているが、中文で三年間を過ごしたことを、今になつてやつと有難いことだと思うようになった。

当時御存命であった奥野信太郎先生ならびに両先生から、文章を書く者の生き方、基本的な姿勢が柔軟性に富むものでなければならぬとお教えていただいたことに、今更ながら気がついたのである。

両先生のご健康とご健筆を心からお祈り申し上げたい。

(文筆業・昭和四十年卒)

昭和四十二年の初夏であつた。

三田の西校舎の二階で村松先生の「中国文学史」を聞いていると、窓の外から金魚売りの声が聞えてきた。突然講義を中止した先生は窓際に立ち、「今頃金魚売りの声は珍しい」と言って懐かしそうに窓外を眺められた。

三十六才の老学生の私は、先生に「中国文学史」や「論語」などを習つたが、この金魚売りの声のみが脳裏に響くだけである。

実に不勉強な学生であつた。

当時、市川の知人の家に止宿し品川にも部屋を持つていた私は、大井町線を利用してよく村松先生の家に碁を打ちに行つた。好い勝負であった。時に遅くなり「お壽

「村松・藤田 両先生と私」

中 村 文 峰

司」など御馳走になつた。どちらが「白」で打つていたか定かではないが当事者はどちらも「白」で打つていたと主張するであろう。

「碁打ちに弱いもの無し」と言つから。

昭和四十八年五月廿七日南禪寺塔頭の一院に住職し晋山式を挙行したとき、先生は東京から遠路出席された。そのときはあまり良い待遇ではなかつたので、又人生の一区限りの機会に何か催すことがあれば出席して戴き、当時の負債を返済したいと思つてゐる。

藤田先生には通三丁目で開かれた中文の会でお会いしたことを思い出す。

和服で出席した私を見て未だ存命中であつた奥野先生

は

「藤田君と御同業ですね」と言われた。

私はこの会合で明治時代釈宗演といつ禅僧が慶應に学ばれたこと、また前年南禪寺の柴山管長と米国に渡り禅を布教したこと、そのとき新しい學問が必要であると痛

感して釈宗演老師のように慶應に学ぼうと決心したことなどを話したがあまり反応はなかつた。殊に柴山管長については誰も知る人がなく、改めて十五年間京都の禪堂に籠つていた自分と、東京の学生とでは住む世界が違うのだなあという感を深くした。

隣席の藤田先生には最近林語堂著「北京好日」を読んだ話しをした。先生は、「北京好日」(bei jíng hào rì)の発音を繰り返し私に教えられた。その後先生には中国語につ

いていろいろ学んだが、現在正確に発音できるのは「北京好日」の四字だけである。これは先生の一対一の教授のお陰である。

昭和六十三年六月十六日、この廿年前のときのことを確かめるべく東京魚藍坂にある宝徳寺に藤田先生を訪ねた。

豫め電話しておいたのであるが先客の母娘一人連れがあり、玄関先にて新盆の誦経を依頼しておられた。玄関

の壁面には法事の年間表が張り出されており、本堂は古い建築で最近東京で失われた「寺らしい雰囲気」を境内に留めていて、瞥見した先生は老僧の面影であった。

先客が去られた後、早速先生に釈宗演老師のことを正

すと、慶應佛教青年会の先輩であり福沢喻吉先生や藤原銀次郎氏との関係を話された。詳しく聞くべきであつたが夕刻でもあり寺らしい空気を充分吸つたただけで満足し玄関でお別れした。

ある会合の席での雑談の中で村松先生が小説を書いていたことがあると語られた。

そこで私が、

「小説に大切なのは筋書きですか」

と尋ねると、

「いや構成力ですよ」と返事をされた。

この対話を隣席で聞いておられた藤田先生は、

「文学はつくりごとですよ」と述べられた。

この文学における構成の大切さは自分なりにその後の

著述の上で大いに役立つた。また藤田先生の言も親鸞上人の「歎異抄」の中の「火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たわごと、實あることなし」を聞くようであった。

但し、この廿年前の会話の正否については未だ両先生に確認していない。

長い雲水生活（現在も雲水生活の延長）の中で、この慶應時代は虚実皮膜の一刹那の間のできごとのようにも自然と思い出されるが、自分の人生にとつてはミクロ的視野からマクロ的視野に転換する一時期といえよう。その間、村松・藤田・佐藤・岡の諸先生には種々お世話をなつた。紙面を借りて厚く御禮申上げる次第である。

最後に退任なさる村松・藤田両先生の今後の御健闘を期待して筆の措くこととする。

（永保寺住職・昭和四十三年卒）